

日本の絵本を非日本語で読む：法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの試み

横山, 泰子

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

167

(終了ページ / End Page)

185

(発行年 / Year)

2011-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007746>

日本の絵本を非日本語で読む

法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの試み

横山 泰子

日本の児童書は、外国で翻訳され広く読まれている。そして、それぞれの国や地域の文化に合わせて絵や文が改変されるケースもみられる。日本の絵本の翻訳版を並べてみた時、何か発見があるかもしれない。そんな考えから、法政大学大学院の担当授業で「日本の絵本を非日本語で読む」という試みを行った。本稿では、実際に授業で行っていることと、その経験を通じて考えたことを記し、識者のご教示を願いたいと思う。

I

私は、2003年度から法政大学大学院国際日本学インスティテュートで兼任講師をしており、「伝統文化の民衆世界I・II」という科目を担当している。インスティテュートの特色は、日本研究を行う際に、外国との比較、外国からの視点を重視する点にある。実際に多くの外国人学生が在籍しているので、外国人と日本人が語り合い、日本文化を内側と外側から考える授業を行いたいと考え、2010年度後期から授業で日本の絵本の翻訳版を読むことにした。教材として絵本を選んだのは、以下の理由による。

- 1 受講生にとって、日本の絵本はほぼ未知の領域であること。
- 2 外国語に翻訳された日本の絵本は、それ自体興味深い研究対象になり得ること。
- 3 絵本は日本的な文化の一つとして位置づけられること。
- 4 大人の日本人と外国人が絵本を読みあうことは、日常生活上ではあまり経験できないため、発見が予想されたこと。

まず、最初の点である。私の授業に参加する学生は、日本人であれ外国人であれ、おおむね日本の絵本について多くを知らない。絵本は基本的には子どもを対

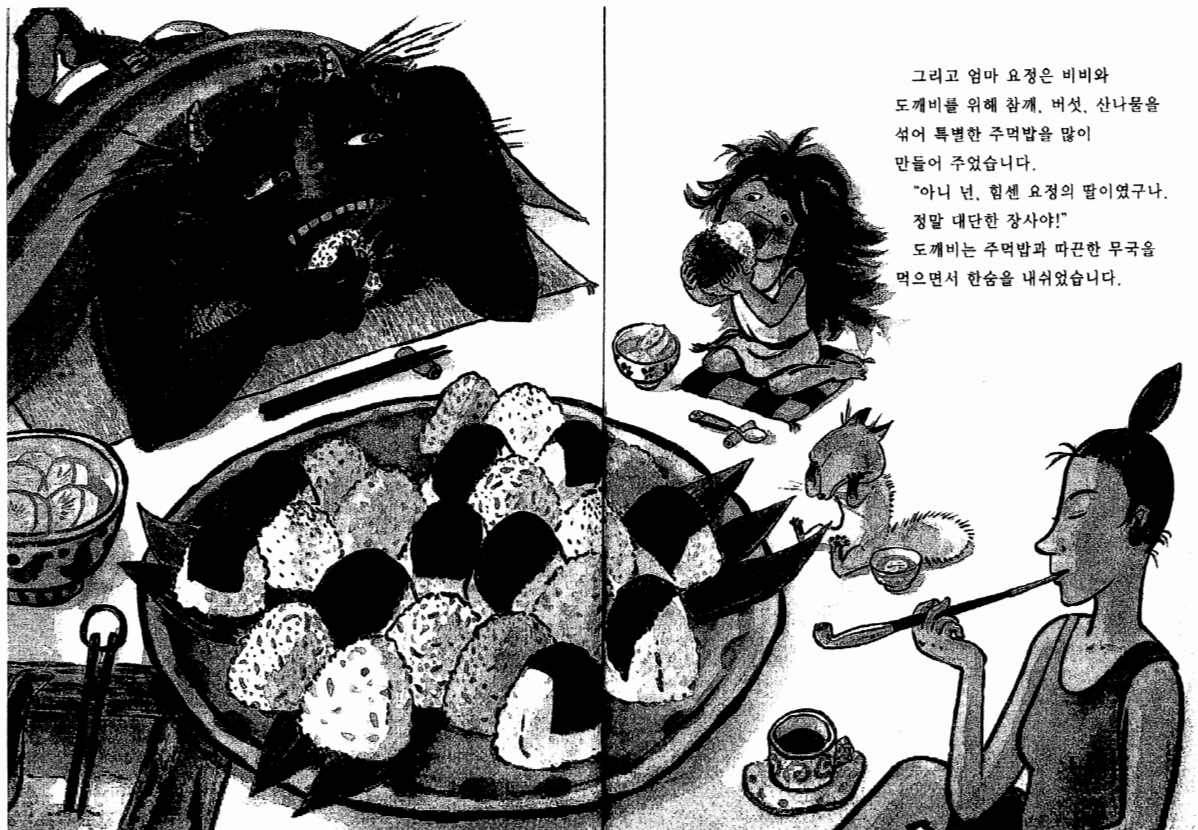
象としているため、幼少期に接していた人も、成長するに従って離れていく。昔絵本に親しんだ学生も、最近新しく出版された絵本については詳しくない。また、外国人留学生は日本文化を学ぶために来ているので、日本文化全般に興味を持っている。しかし、日本のマンガやアニメーションに精通していても、絵本について知っている学生はほとんどいない。以上から、受講生はバックグラウンドに関係なく、新鮮な目で公平に資料に接することができるのではないかと思われた。

また、日本の子ども向けの本は、19世紀から現代にいたるまで、諸外国語に翻訳されている。例えば、1885年からは、日本昔話などを外国語に訳して挿絵をつけたちりめん本が海外に輸出され、日本文化を紹介する役割を果たした⁽¹⁾。1960年代からは出版社が日本の児童書を積極的に海外で出版するようになり、1980年代から90年代にかけては韓国や台湾で日本の児童書の翻訳件数が増加した。今、日本の児童書の翻訳出版件数の多い国は、一位韓国、二位台湾、三位中国の順になっているという⁽²⁾。この事実を、私たち日本人はあまり認識しておらず、また韓国や中国から来ている留学生たちも知らずにいるが、極めて興味深い現象である。児童書の翻訳出版についての研究は少ないが、日本の本が歴史的にどのように翻訳され、各国で受容されているのかという問題は、国際化の時代の日本文化研究上、重要な問題ではないかと思われる。

第三点目について。絵本は絵とおはなしが一緒になったものだが、もともと日本人は伝統的に「語り絵」を好むといわれる⁽³⁾。古くは絵巻物、江戸期の草双紙などの絵本類、現代のマンガやアニメなど、絵と物語を別々の表現形態にせず、一緒に作っていくのが日本的な文化であるとすれば、日本の絵本もまた、児童文化という枠組みをこえ、日本文化の一つという大きな枠組みの中で考察する必要があるのではないかと思われる。

近年、作り手が国を越えて絵本を協同制作する動きがある。『桃源郷ものがたり』（松居直文 蔡皋絵 2002年 福音館書店）や、『鹿よ おれの兄弟よ』（神沢利子作 G・D・パヴリーシン絵 2004年 福音館書店）、『万里の長城』（加古里子文 加古里子/常嘉煌絵 2011年 福音館書店）などを見ると、読者サイドが国を超えて絵本を協同で読んでもよいのではないかと思われた。

実際、外国人学生と日本人学生がともに絵本を読むという、普段行わない作業をすることによって、自国の文化と他国の文化の共通点と相違点に気づくきっかけが生じる。2010年度の授業で、実験的に『まゆとおに』（富安陽子文、降矢な



그리고 엄마 요정은 비비와
 도깨비를 위해 참깨, 버섯, 산나물을
 섞어 특별한 주먹밥을 많이
 만들어 주었습니다.
 “아니 넌, 힘센 요정의 딸이었구나.
 정말 대단한 장사야!”
 도깨비는 주먹밥과 따끈한 무국을
 먹으면서 한숨을 내쉬었습니다.

図1. 『도깨비를 혼내버린 꼬마요정』より転載

な絵、福音館書店、1999年)の日本語オリジナル版と、韓国語版(図1)を学生と眺めていた時のことであった。「絵の中で何かわかりにくいことはないか」と私が質問したところ、食卓の絵を見た中国人留学生の朱美臻さんが「おむすびの絵は中国人にはわかりにくい」と発言した。彼女は子どもの頃、中国で日本のアニメーション「おむすびころりん」を見たが、転がっていくおむすびが何なのかわからず、まわりの大人に聞いても誰も知らなかったこと、冷えたものを飲食するのは毒だという考え方から今でも中国ではおむすびはあまり売られていないという話をしてくれた。それに対して、韓国人留学生の金孝珍さんは、「韓国ではキムチなど韓国の具材を入れたおむすびが人気で、サムガクキムパプの名で親しまれている」と語った。この時のやりとりが印象に残ったという日本人学生の熊野賀津江さんは、学期末レポートでこの件を取り上げ、「短い絵本の中にも普段と違う角度から見れば違ったものが見えてくる」とまとめていた。私は、こうした経験を積み重ねることで、ともに日本文化を研究する者同士が、身近な問題を素材にしながら日本文化を内と外から語るができるのではないかと考えた。

さて、2011年度は、「日本の絵本を非日本語で読む」というテーマを掲げたところ、受講生13名が集まった（留学生11名、日本人学生2名）。日本人学生には、「日本の絵本を非日本語で読む」経験をしてもらうために、ちりめん本を使うことにした。彼らには英語のちりめん本のコピーを渡し、英文を和訳する課題を出した。ある程度の難易度が保てるよう、自分の知らない物語を選んでもらうようにした。授業では、自分の日本語訳を披露してもらい、絵あるいは文章上わかりにくい点、気づいた点などを報告してもらった。また、留学生には、自分の母語に翻訳された日本絵本1冊を読んでもらい、日本語に訳し直すという課題を出した。例えば、中国人留学生の場合は、日本絵本の中国翻訳版を読み、自分で日本語に訳し、訳文を皆の前で音読するのである。そのあとで、私がもとの日本語版を音読する。当然のことながら、学生の日本語訳と、日本語版には距離がある。その距離は、学生の誤訳の場合もあるが、中国語版翻訳者の誤訳あるいは意識のために生じている可能性もある。誤訳や意識があったとすればなぜそうなったかを、皆で考えることにした。翻訳担当者には、翻訳の際に難しかったことや気づいたことを報告してもらい、それについても出席者全員で討論することにした。以下、取り上げた絵本を紹介しながら、学生たちと対話したこと、後日私が調べたことについて記す。

II

韓国では1990年代以降児童書の出版が盛んで、現代韓国絵本の質の高さは世界的にも注目されている⁽⁴⁾。韓国の市場では、国内の絵本とともに外国の翻訳絵本も享受されており、その中に日本の絵本もある。また、台湾では1982年以降、日本の児童書が翻訳され、絵本も多く読まれているという。中国では2005年頃から絵本（図画書）が翻訳されるようになり、ここ数年は絵本ブームが起こっているという⁽⁵⁾。日本の絵本が次々と翻訳されているなか、2011年度前期に取り上げた絵本は、以下のとおりである。

『だいくとおにろく』松居直再話 赤羽末吉絵 福音館書店 1962年

『ぐりとぐら』中川李枝子作 大村百合子絵 福音館書店 1963年

『ふしぎなたけのこ』松野正子作 瀬川康男絵 福音館書店 1966年

『スーホの白い馬』大塚勇三再話 赤羽末吉絵 福音館書店 1967年

『はじめてのおつかい』筒井頼子作 林明子絵 福音館書店 1976年

『きょうはなんのひ』瀬田貞二作 林明子絵 福音館書店 1979年

『めっきらもっきらどおんどん』長谷川摂子作 ふりやなな絵 福音館書店
1985年

『ぼく、おかあさんのこと』酒井駒子文絵 文溪堂 2000年

なお、留学生の出身国は韓国と中国であったので、日本語版の他、韓国語版と中国語版（中国で刊行された簡体字版と、台湾で刊行された繁体字版）を適宜用意し、できる範囲で英語版なども加え、読み比べをしてみた。

絵本が外国語に翻訳される時、しばしば見られるのは、書名を改変するケースである。日英絵本の翻訳版の比較を行った古市久子・西崎有多子氏の研究では、国の習慣に従って理解度を深めるため、訳者が工夫をしているという⁽⁶⁾。今回扱った絵本でも、そのような例があった。

『ぼく、おかあさんのこと・・・』は、日本語版の表紙に、うさぎの男の子がビスケットの箱を見ながら考えている絵がある。題名からは「ぼく」が「おかあさんのこと」をどう思っているのかわからない。うさぎの子が、洗濯をしてくれなかったり寝坊したりする母親、自分とは結婚できないという母親を「きらい」と言って家を出ていくが、すぐ戻って来て母親と抱き合い、愛情を確認しあうという内容である。つまり、「ぼく」は「おかあさんのこと」を本当は「好き」なのだが、しばしば「きらい」だと感じており、その相反する複雑な感情が「ぼく、おかあさんのこと・・・」という曖昧な題名に反映しているのである。

この絵本の題名は、中国語（簡体字）版では『我讨厌妈妈』、韓国語版では『나는엄마가좋아』、フランス語版では“Moi, ma Maman...”となっている。中国語版の題名を直訳すると「ぼく、おかあさんがきらい」、韓国語版は「ぼく、おかあさんが大好き」、フランス語版は「ぼく、ぼくのおかあさん・・・」となり、三者三様の翻訳である。また、中国人学生が中国語版の表紙を見たときとたんには笑ったので、中国語の題名は中国人読者の注意を瞬発的にひきつけたように見えた。彼らに「なぜ、中国語版ではおかあさんが嫌いという題名になっていると思うか」とたずねたところ、複数の中国人留学生が「子どもがおかあさんを好きなのは当たり前なので、おかあさんが好きなどという題名では読者が手にとらない」と答えた。本来好きはずのおかあさんがきらいとはどういうことだろう、と思って読者が手にとるであろうというのだ。読み手の側の読書意欲・購買意欲をそそるために刺激的な表現が選ばれたという考えである。中国人は反語的な表現を好む

という意見もあった。

それに対して、韓国人留学生は「おかあさんがきらい」という表現に抵抗感を示した。子が母を好きなのは当たり前であり、「おかあさんが好き」と表現して然るべきところ、わざわざ「おかあさんがきらい」と表現するのは許容されないだろうという意見であった。

また、中国語版も韓国語版も、意味こそ違ってはいるものの、おかあさんに対するぼくの感情を表現している点では共通している。日本語版が「ぼく、おかあさんのこと・・・」と主人公が何を考えているか明らかにしないのとは対照的である。日本語の題名は、構造上文末までたどり着かないといたいことがわからない日本語の特性に由来しているのではないかと考え、日本人の自己表現の曖昧さを指摘する学生もいた。

日本人であり日本語オリジナル版を最初に読んだ私には、『ぼく おかあさんのこと・・・』という曖昧な題名を、「好き」にせよ「きらい」にせよ、ことばを補って訳すことに抵抗があった。表紙のうさぎの子の表情と題名からは、ぼくがおかあさんのことをどう思っているのか読みとれない。そこで、読者は「好きなのかな」「きらいなのかな」と彼の気持ちをはかりながら読みすすめる。読者は、うさぎの母親にはかなり問題があり子どもに嫌われても当然だと思うのだが、二人の仲がうまくいかないことを心配しつつ、ページをめくり、最後に二人が抱き合うところで安堵する。ぼくがおかあさんをどう思っているかずっと曖昧なままなのが、最後に「大好き」という彼の感情が確認できるという物語なので、最初から題名に「好き」「きらい」という語を加えるのは、私には過剰な表現に思えたのである。その点で興味深いのがフランス語版の例である。理工学部創生科学科の同僚で、フランス語教育に携わっておられる元木淳子教授に確認したところ、フランス語版の題名は、ぼく (Moi) とぼくのおかあさん (ma Maman) を並列しており、両者の関係については好きとも何とも示していないという。その点では、フランス語版の題名が日本語版のニュアンスを最もよく生かしているのではなかろうか。

いずれにせよ、題名をどう訳すかで絵本の印象は変わる。学生の反応を見た限りでは、中国でも韓国でも、現行の題名以外では売れないのではないかと思われた。実際に作品を見ながら、このことを学生とともに発見したのは興味深い経験であった。

III

翻訳の際、絵と文章が改変されるという例もある。『はじめてのおつかい』は、日本語版、中国語（繁体字）版、韓国語版、そして英語版を読み比べてみた。この作品は、五歳の女の子「みいちゃん」が母親に頼まれ、牛乳を買いに行く物語である。途中で小銭を落としたり、店の人に気づいてもらえなかったりと、子どもなりの苦労を重ね、ようやく牛乳を買って帰る。

四冊の本を比べてみた時、文章上の改変が目についたのは英語版（“Miki's First Errand” ピーター・ハウレット、リチャード・マクナマラ訳 アールアイシー出版 2003年）である。店に到着した女の子の後ろに「くろいめがねをかけたおじさん」がやって来る場面がある。日本語版では、おじさんは「たばこ！」とどなり、たばこを買って帰る。中国語版も韓国語版もたばこを買うことになっているが、英語版ではたばこがオレンジジュースに変更されている。

おみせには、だれも いません。
みいちゃんは、おおきな しんこきゅうを
ひとつしました。
それから、
「きゅうにゅう ください」
と、いいました。
うんと おおきな こえを だそうと
おもったのに、ちいさな こえしか
でませんでした。

だれも できません。



図2-A. 『はじめてのおつかい』（日本語）より転載

가게에는 아무도 없었습니다.
이슬이는 가쁜 숨을 크게 한번 내쉬었습니다.
그리고 나서,
“우유 주세요.”
하고 말했습니다.
아주 큰 소리로 말하려고 하였지만,
모기처럼 작은 소리밖에 나오지 않습니다.

아무도 나오지 않습니다.



図2-B. 『이슬이의 첫 심부름』（韓国語）より転載

英語版が、たばこをわざわざオレンジジュースに変更しているのには、文化的な背景があるのではないかと思われたが、クラス内に英語圏出身者がいなかったため、理工学部創生科学科の同僚・福澤レベッカ教授に質問してみた。福澤教授はアメリカ人で、文化人類学が専門である。福澤教授からは「アメリカではたばこは非常に有害なものだと認識されている。たばこの存在を子どもから隠したいので、絵本で大人がたばこを買う場面も見せたくないのではないか」とのご意見をうかがった。出版社の事情があるかもしれないので、英語版を出版したアールアイシー出版株式会社に直接質問したところ「子ども向けの絵本にたばこという言葉載せるのは思わしくないのでは」との答えがかえってきた。

以上のことから、子どもの絵本にたばこはふさわしくないとする英語圏の考え方がわかった。もちろん日本人もたばこが子ども向けとは考えていないが、絵本にたばこの文字が載っていることは格別問題にはされないのだ。思えば、私も『はじめてのおつかい』英語版を見るまで、たばこを買いに来たおじさんの件が特に問題だとも思わず読み過ごしていた。日本語版のたばこをそのまま翻訳する社会もまた、たばこに対して日本と同様の許容度を持っているのではないだろうか。

『はじめてのおつかい』の翻訳版は、いずれも人名と絵が改変されている。主人公の「みいちゃん」と友だちの「ともちゃん」の名前が違う名前になっている。例えば、中国語版ではみいちゃんが恵ちゃんに、英語版ではともちゃんがTomになっている。このような例は特別ではなく、授業で取り上げた林明子の別の絵本『きょうはなんのひ』でも、人名が変更されていた。前掲の古市、西崎論文にも指摘があるが、このような例は絵本の翻訳に際にしばしば見られることで、必ずしも珍しいことではない。

また、『はじめてのおつかい』の絵には、様々な看板や表札など、多様な文字情報が目につく。張り紙や看板などの文字情報が日本語のままであったとしたら、外国の子どもたちはこの絵の世界を異国の物語として意識するのではないかと思われるが、いずれも翻訳版では変えられていた(図2-A~D)。これらの文字情報は中国語版、韓国語版では全て翻訳されており、英語版は文字をぼかしている。この点について、アールアイシーに質問したところ、「商標登録されているものは絵本に載せるのは避けたい。たとえ商標登録されていなくても、特定できるものは避けたい」との翻訳方針であるとのことだった。

韓国語版と中国語版の看板や張り紙などは、必ずしも日本語を直訳しているわ

けではなく、現地の事情にあわせた表現に改変されているようだ。登場人物名も変更されていることから、韓国語版と中国語版に接する子どもたちは、『はじめてのおつかい』がもともと日本の物語であることを意識することなく、絵本を眺めるものと思われる。

また、学生には絵をどう思うかたずねてみた。描かれている風景、町の雰囲気などがいかにも異国という感じであったならば、登場人物名や店の看板などを変えたとしても、外国の子どもたちは『はじめてのおつかい』を、よその世界の物語として受け取ると思ったからである。概して留学生たちは林明子の描く日本の風景にことさら異国としての距離感を感じないようだった。授業では『はじめてのおつかい』の他、『きょうはなんのひ』も扱ったが、『きょうはなんのひ』の主人公を「昔の自分みたい」と親しみを感じる留学生もいた。林明子の絵本は他にも『まほうのえのぐ』や『あさえとちいさいいもうと』などが中国語・韓国語に既に翻訳されているが、留学生の反応から、彼女の暖かみのある絵が好感を持たれる



図2-C. 『第一次上街买东西』（中国語繁体字）より転載



図2-D. “Miki’s First Errand”（英語）より転載

のだろうと思われた。

なお、授業では取り上げられなかったが、『おふろだいすき』（松岡享子作 林明子絵、福音館書店、1992年）は、世界八カ国で翻訳されている。男の子が入浴していると、浴槽から動物が次々に出てくるという物語である。イギリス版、オランダ版、旧ソ連（モルドバ語）版では、日本オリジナル版と異なり、浴槽のふたが描かれていない。浴槽にふたがない国からの注文で、絵を描き直したというが、中国と韓国では原書と同じ絵であるという⁽⁷⁾。日本対中国・韓国は文化の壁が低く、そのことが絵本を見た時の読者の反応と関わっているのであろう。

IV

絵本は、文字を読みこなせない子どもを対象としている。そのため、絵本の文章は、音読にふさわしいように作られている。絵本は視覚的な媒体であると同時に、聴覚的な媒体なのである。学生たちには絵本の特性を説明し、教材を翻訳する際には、音読にふさわしい子どもむけの文を作成するよう、こころがけてもらった。絵本の文章は平易であるので内容を理解するのは容易だが、絵本的な文に翻訳するのは難しい。翻訳担当者には「何が難しかったか」を報告してもらったが、韻文が入っている箇所やオノマトペの処理を挙げる学生が多かった⁽⁸⁾。身近に子どもがいないので、子どものセリフを考えるのが難しかったという解答もあった。

私は、絵本の翻訳を行うことで学生たちの日本語表現の幅を広げてほしいと思ったのであるが、学生のコメントから、日本絵本に歌やオノマトペが頻出することに気づかされた。実際、私が子どもに読み聞かせをしていて思うのだが、彼らはユーモラスな歌やオノマトペの面白さによく反応する。言葉の意味はともかく、面白い音が発せられることを喜び、記憶して繰り返したりする。

そのような音の面白さを感じさせる絵本として『めっきらもっきらどおんどん』がある。この絵本は、主人公かたがでたらめな歌を歌ったことで不思議な世界に入り込み、おばけと遊ぶ物語である。作者長谷川楳子はインタビューで「末っ子の次男を自転車で保育園に送る時、2人で童謡を歌いました。掛け合って歌うと音とリズムを楽しんでとても喜びました。かたがめちゃくちゃに歌う『めっきらもっきら どおんどん』は、その時できた歌です」と語っている⁽⁹⁾。つまり、「めっきらもっきら どおんどん」には意味がなく、めちゃくちゃの歌であると

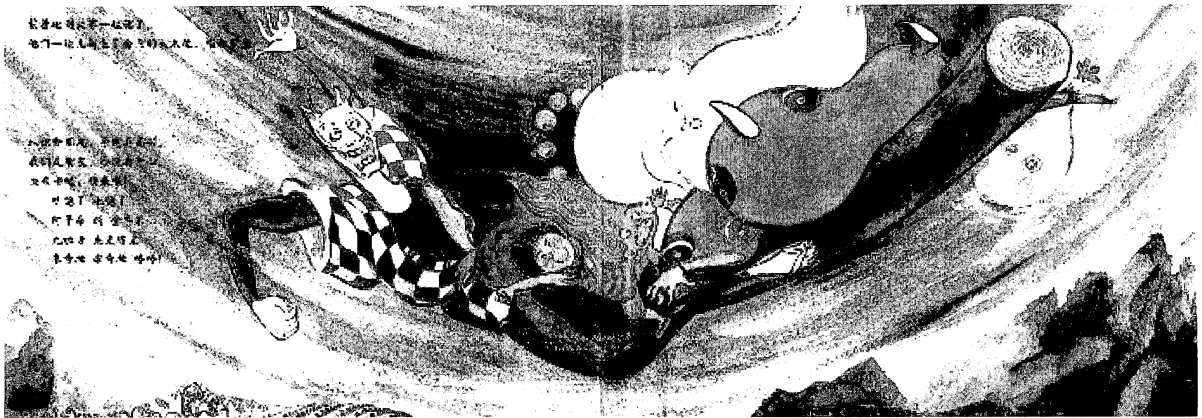


図3. 『米奇拉摩奇拉咚咚』(中国語簡体字)より転載

ころが子どもには面白いのである。おばけの世界から日常に戻ったかんたは、もう一度おばけと遊びたいと思うが、歌を忘れてしまったために二度と彼らに会えない。絵本の最後は「きみならおもいだせるかな」となっていて、読者の子どもと絵本の世界がつながるようになっている。

私には『めっきらもっきら どおんどん』は日本的な物語であり翻訳が難しい本だとの思い込みがあった。しかし、2010年に中国の南海出版会社が中国語訳(簡体字版)を出したので、早速入手して授業でも取り上げた(図3)。中国語では『米奇拉摩奇拉咚咚』(MIQILA MOQILA DONGDONG)である。考えてみれば、「めっきらもっきらどおんどん」は日本語で意味をなさない音、いわば呪文であり、日常語ではないからこそおばけを誘い出してしまうのだ。それが日本の子どもにとって愉快なのだとすれば、MIQILA MOQILA DONGDONGという中国語で意味をなさない音もまた、中国の子どもには異界の言葉のように聞こえ、面白いのかもしれない。

この『米奇拉摩奇拉咚咚』を見ていて、本文にピンイン(中国語の発音を表記するためのローマ字)がついていないことに気がついた。2011年に教材として使った南海出版会社の出版物は他に、

『木巧和鬼六(だいくとおにろく)』2008年

『神奇的竹笋(ふしぎなたけのこ)』2010年

『苏和的白马(スーホの白い馬)』2010年

があるが、いずれもピンインがついていなかった。

中国語は漢字のみを使うため、字の読み方を習う際にはピンインが使われる。

日本人が中国語を学ぶ時、ピンイン付きの教科書を使うが、中国の子どももピンイン付きの本から始めるようだ。中国人留学生の話では、小さい時はピンインを読むのがとても速かったが、漢字の学習がすすむにつれ、ピンインが邪魔になってくるようだ。そして、ピンインが不要になる頃、子どもはピンインなしの本に移行するという。こうした言語学習の仕方は、漢字を使っている私たち日本人にも容易に推測できる。

現代の日本の絵本は、対象年齢によって表記の仕方が異なっている。対象年齢が低いものほど、ひらがなが使われている。対象年齢があがるにつれ、カタカナや漢字がまざるようになるが、これは現代の一般的な日本の子どもの国語学習パターン（ひらがなをおぼえた後にカタカナ、漢字を学ぶ）に即していると思われる。小さくて字が読めない子どもは、もっぱら大人が読んでもらうのを聞きながら絵を眺める。成長してひらがなをおぼえはじめると、絵本を少しずつ音読し、やがて一人で通読できるようになる。絵本の中のカタカナや漢字には大抵ルビがふられており、ひらがなさえ読めれば全体が読み通せる。さらに大きくなってカタカナや漢字が読めるようになった子は、ルビを必要としなくなっていく。このプロセスは中国の子どもの事情と似ているのではなかろうか。

私は中国の出版事情に暗いが、教材準備のために中国書を扱う書店のカタログを見るうち、中国の絵本にはピンイン付きのものとなないものがあることを知った。児童書にピンイン付きのものが存在するにもかかわらず、なぜ日本の翻訳絵本にはなぜピンインがついていないのか。偶然かもしれないが、興味深い点に思われた。

中国語の絵本でピンインがついていないものは、漢字の知識がなければ読めないため、読み聞かせをする大人か、漢字を読めるほどに成長した子どもむけということになる。福音館の絵本には、対象年齢の目安が書かれているが、『めっきらもっきらどおんどん』の場合は、「読んであげるなら3才～自分で読むなら小学校初級むき」とあった。この本がピンインなしで中国語に翻訳されているのだ。大人が読み聞かせをしてやればもちろん3才から十分楽しめるだろうが、漢字をおぼえて自分で読めるようになった時には絵本の内容が幼稚に思え、つまらなくなってしまうのだろうか。もちろん、『苏和的白马』のような悲劇的で長い物語は、ある程度成長した子どもに向いており、ピンインがなくてもよいだろう。しかし、絵本によっては、ピンインをつけた方が、大人に読み聞かせてもら

う時期から自分で読める年齢まで、一冊の本を子どもが長く楽しめるのではないかと思われた。

私はこの疑問を、理工学部創生科学科の呉曉林教授（中国出身の経済学者で、現在日本で子育て中）におたずねしてみた。呉教授のお話では、たしかに中国の児童書にはピンインつきのもとのないものがあるとのことだった。呉教授は、個人的な意見として、「ピンインがついているものはいわゆる古典ではないか」と話して下さった。ピンインは画面上スペースをとる上、見た目が悪くなるし、つけるのに手間もかかる。あえてつけるなら、親の世代が「小さい頃から親しんでほしい」と望む名作童話に限られているのではないかとのお話であった。また、ピンインなしの『米奇拉摩奇拉咚咚』は、一人で字が読めるようになった子どもが読むには、内容が幼稚ではないかという疑問に対しては、「日本の絵本は、絵に動きがあって面白い。成長しても、絵を見ていれば楽しめるのではないか」とのご意見をいただいた。たしかに、『めっきらもっきら』は、絵本を横にしたり縦にしたりしながら眺めるように構成されており、絵の動きが面白い作品である。

ところで、台湾では、標音記号としてピンインではなく注音符號が用いられている。私の見た範囲では、台湾の絵本は漢字に注音符號がついていた。クラスに台湾出身者がいなかったのも、台湾の絵本事情を知るため、波多野想琉球大学観光産業学部准教授に質問をしてみた。2011年3月まで台湾の中国科技大学（台北市）に勤務し、現地での育児経験をお持ちの波多野准教授によると、「台湾でも多くの日本人作家絵本が豊富に翻訳されており、五味太郎の絵本が多くあったのを記憶している。翻訳に限らず、絵本には漢字に注音符號が併記されている。台湾では注音符號を幼稚園で習うので、かなり早い時期に漢字に併記された注音符號を読みながら漢字にも慣れる」とのことだった。

前掲の『はじめてのおつかい』の中国語訳『第一次上街買東西』（英文漢聲出版有限公司 刊）は、台湾の繁体字版であり、注音符號がついていた。福音館の日本語オリジナル版は「読んであげるなら3才～自分で読むなら小学校初級むき」と対象年齢が明記されている。『第一次上街買東西』にも「3歳～5歳 父母講給 小朋友聽」「6歳～8歳 小朋友自己閱購」と書かれている。「3歳～5歳は大人が読み聞かせ、6歳～8歳 子どもが自分で読む」という対象のとらえ方は、日本とほぼ同様であった。

絵本が中国語に翻訳される際のピンインと注音符号の問題は、出版社の事情や、現地での絵本観や教育環境などをあわせて考察しなければならない。現状では私の手にあまるので、今後の課題としておきたい。

V

授業の最後に、学生たちにはレポート提出を課した。日本人学生と外国人留学生には、異なる課題で書いてもらうこととした。日本人学生には「授業で扱った事柄をもとに、自分の研究と関連づけて何らかのレポートを書く」というもので、基本的には自由テーマである。留学生に出した題は、「翻訳したい日本の絵本」であった。現在日本で流通している日本の絵本の中から、自分が母語に翻訳したいと思うものを一冊選び、選択の理由を記してもらった。多くの絵本の中から留学生が何を選んでくるか、私には想像がつかなかったので、提出物を読むのが楽しみであった。そのうち、二人のレポートを紹介したい。

韓国人留学生の朴庾卿さんは、韓国絵本の歴史をふまえ、まだ韓国語に翻訳されていない日本絵本の中から選ぶという方針だ。彼女は「本が読みたくなる絵」「ストーリーのいい絵本」「日本的な話や絵」「韓国にない発想の話でありながら、受け入れそうな話」の選定基準を設け、『おでんさむらい』（内田麟太郎文・西村繁男絵、くもん出版刊）という絵本シリーズを選択した。「こぶまきのまき（冬）」（図4）（2006年）「しらたきのまき（春）」（2008年）「ちくわのまき（秋）」（2008年）「ひやしおでんのまき（夏）」（2010年）と、各巻が



図4. 『おでんさむらい こぶまきのまき』より転載

日本の四季に対応している。ひらた・おでんという浪人さむらいがお供のかぶへい（カブトムシ）と、江戸で起こった事件を解決する物語である。朴さんは「四季を楽しむにぎやかな江戸町人とその風景が西村さんの絵で詳しく描かれており、まるで時代劇を見るように話の中に吸い込まれる」と述べる。

日本の江戸時代を舞台とした「時代物絵本」は、飯野和義作『ねぎぼうずのあきたろう』などが冒険活劇として人気があるが、『おでんさむらい』は飄々とした雰囲気漂う。どの巻にも化け物が登場し、チャンバラシーンはあるが、ひらた・おでんは化け物を助けてやったり逃がしてやったりで、殺伐とした感じが無い。文章も

「な、なんだ、おまえは！」

よいどれぎむらいは、むんずと うでを つかまれ ふりかえりました。

「なのるほどの ものではございません。

ひとよんで へんてこぎむらい、ひらた・おでん。こちらは とものかぶへいです。きょうは わたくしどもに めんじ、このこぞうさんを ゆるしてやってください！」⁽¹⁰⁾

といった感じで、音読してみると時代劇映画的なセリフまわしが楽しい。作品の時代劇的世界は現代人の日常生活から遠いが、子どもは大人よりも奇想天外な物語を受容するので、絵が魅力的で物語が面白ければ喜ぶのではないだろうか。また、韓国には映画やドラマのジャンルに「時代劇사극（サグク）」がある。『おでんさむらい』も「外国の時代劇絵本」として位置づけられるかもしれない。

また、朴さんは、シリーズ全体がおでんという食物を素材にしていることについて

韓国にも오뎅（おでん）はある。日本統治時代に日本から入ってきた。しかし、韓国のおでんは日本のそれと少し異なる。韓国はおでんの種類がすくなく、すべてをおでんというが、日本には色々な種類があり、その名も個々異なる。韓国の食べ物だと思っているこどもに、隣国、日本にも似たような物を食べるということがこの絵本でも勉強できることのひとつである。この『おでんさむらい』シリーズは、確かに韓国と異なる発想で描かれてあるが、それが違和感を感じさせるこ

とではなく、新鮮で興味をそそる話として受け入れられると思われる。

と書いている。日本の「おむすび」の絵が、中国人にはわかりにくいという話を先述したが、外国絵本から、生活文化上の自他の類似点や相違点が発見できることは数多くある。絵本『おでんさむらい』も、そのような気づきを子どもに与えるであろうと朴さんは考える。余談だが、韓国でおでんが食べられているという事実は、今の日本人には驚きであり、過去に私の授業に参加していた国際日本学インスティテュート所属の日本人学生が、おでんをテーマにレポートを書いたこともあった。『おでんさむらい』はこれと逆の気づきを、韓国の子どもに与えてくれるかもしれない。

外国の絵本は、風景や生活習慣の異なる国々の様子を絵で読者に伝えてくれる。こうした絵本の機能に朴さんは自覚的であり、留学生ならではの視点で『おでんさむらい』を選んだのである。日常生活レベルの情報を交換し、自国の文化が外国とどのような点で共通し、相違するのかを考えるのは、現代人の課題であると私は思うが、絵本は異文化理解のためのツールとして有効利用できるだろう。

中国人留学生の南春英さんは、『あしたのぼくは・・・』（2006年、ポプラ社）を取り上げた（図5）。彼女は課題レポートのためにこの本を図書館で借り、読



図5. 『あしたのぼくは・・・』より転載

んでいるうちに好きになり、書店で買って愛読しているという。『あしたのぼくは』は、「きょうのぼくはこう」と絵と文章で主人公の現状が描かれ、ページをめくると「あすのぼくはこうなる」と未来が描かれるかたちですすむ。「きょうのぼく」は、野菜が食べられなかったり、自転車に乗れなかったりと弱点だらけである。それが、「あすのぼく」になると、野菜も食べられ、自転車も乗れる。それが繰り返され、主人公は次々と弱点を克服していく。

最後のところで、「いまのぼくはおかあさんのだっこがすき」と書かれているので「あすのぼく」が母から自立するのかと思いきや、「あしたのぼくはやっぱりすごくあまえんぼう」なのである。

南さんによると、この本の魅力は「ホッとできること」だという。「1人で外国で暮らしている私にとっては自信をなくしそうなとき、少し背中を押して欲しいとき、丁度そんな時に読んだらぴったりだと思う」と言う。来日間もない留学生は、概して外国での孤独な暮らしに緊張しているものだが、『あしたのぼくは・・・』は、彼女の留學生活に自信と勇気を与えてくれる絵本なのである。主人公が苦手なことは子ども時代の誰もが苦手だったことであり、読者は主人公に親近感を持つ。そして、絵が「様々な表情と動きで『ぼく』の気持ちの落ち込み、喜びを表現していて、みている間私も『ぼく』と一緒に失敗していた気持ちや成功した後の喜びを味わうことができるいい作品だと思う」と彼女は書いている。

『あしたのぼくは・・・』は、主人公が次々と苦手なものを克服しながら、最後の「あまえんぼう」という弱点は克服せずに終わる。できなかったことができるようになるのは、間違いなくいいことであるが、人間はなかなか自分の思うようには変化できない。そこで、最後の「おかあさんのだっこがすき」なまま変わらないという箇所、読者は「変わらないところがあってもいいんだよ」という作者の暖かいメッセージを受け取るのである。自分の変化を望む気持ちと、変化を望まない気持ちの両方が肯定されているところが、読者に希望と自信を与えるのだ。さらに、南さんは「『あしたのぼくは・・・』は年齢を問わずだれでも楽しめる絵本だ。人々に自信と希望を与える『あしたのぼくは・・・』を私は翻訳してみたいと思っている」と締めくくっている。

近年、良い絵本が大人にも楽しみを与え、心を慰める点が注目され、「大人こそ絵本を」という運動が盛んになっている⁽¹¹⁾。絵本は本質的な事柄を簡潔に伝えることができるという点で優れており、絵本のメッセージは子どもだけではなく大人の心をも直接ゆさぶる。留学生が「お気に入りの一冊」を見つけて愛読しているという話は、私にとっては大変嬉しいことであった。

以上、大学院で行っている授業について、記してみた。私は個人的に絵本が好きで、自分自身の興味関心から少しばかり調査研究をしたことはあるが⁽¹²⁾、絵

本の専門家ではない。ただ、絵本というジャンルの奥深さを感じて大学でも使ってみたいと考えただけで、まだまだ手探りの段階である。この授業の運営にあたっては、周囲の方々のご支援をいただき、心より感謝している。本稿を記したのは、現段階での私の課題を示し、ひとえに多くのご教示を得たいがためである。

日本の絵本を非日本語で読み続けるためには、適切なテキストを準備する必要がある。授業が始まる前からある程度使えそうな本をリストアップしておいたが、実際に学生が集まってからでないと、どの絵本を読んだらいいか決められない。昨年度まで私のクラスを受講する留学生は韓国人が多かったのですが、そのつもりで用意していたが、2011年度は中国人留学生が増加したために急遽新しい絵本を入手する必要に迫られた。来年度以降も同様のクラスを開講するとして、どういった学生が来るかはその場にならないとわからない。また、学生には翻訳を課すため、難易度がある程度一定になるよう配慮する必要もある。適切なテキストを迅速に用意することが、最大の課題である。日本絵本の翻訳状況や入手方法など、是非識者にご教示いただきたく思う。

- (1) 石澤小枝子『ちりめん本のすべて』三弥井書店、2004年
- (2) 国立国会図書館国際子ども図書館『日本初☆子どもの本、海を渡る』展図録、2010年。日本の絵本が海外でいかに翻訳されているかを、明治から現代にいたるまで通観している。本稿を成すにあたって非常に参考になった。
- (3) 高畑勲『十二世紀のアニメーション 国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なもの』徳間書店、1999年
- (4) 絵本学会編『ブックエンド』3号、2005年
- (5) 前掲『日本初☆子どもの本、海を渡る』22～32ページ、絵本学会NEWS No.38、2010年
- (6) 古市久子・西崎有多子「絵本の翻訳に何が影響しているか～日英の絵本を通して～」『東邦学誌』38巻1号、2009年6月
- (7) 前掲『日本初☆子どもの本、海を渡る』50ページ
- (8) 田嶋香織「オノマトペ（擬音語擬態語）について」（『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』16号、2006年）は、日本語学習者にとってオノマトペは自然に習得できる語彙群ではなく、オノマトペ表現を紹介する教材は

少ないと述べる。田嶋論文では、オノマトペが使われる例として商品名やマンガの例などが挙げられているが、絵本はまさにオノマトペの宝庫であり、日本語学習者の教材としても利用できるのではないだろうか。

- (9) 「おはなしめぐり：『めっきらもっきら どおんどん』長谷川摂子さん」『毎日新聞』2011年6月22日 東京朝刊
- (10) 内田麟太郎文 西村繁男絵『おでんさむらい こぶまきのまき』くもん出版、2006年
- (11) 柳田邦男『砂漠でみつけた一冊の絵本』岩波書店、2004年
柳田『大人が絵本に涙する時』平凡社、2006年
- (12) 横山泰子「現代の子ども絵本とカッパ」『小金井論集』4号、2007年
横山「女の敵はアマノジャク 昔話瓜子織姫系絵本における妖怪」小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造』せりか書房、2010年

最後に受講生全員の名前を記す。

2010年度 熊野賀津江、金孝珍、奥江勲二、朱美臻

2011年度 申香女、金正華、奥江勲二、尾崎仁美、蘭一博、周曙光、謝晶晶、南春英、王兵、李光子、蔣雯萍、林雪、朱美臻、朴庾卿